

# 異世代交流体験を取り入れた課題探求学習

——多角的視野の拡大と思考の深化をめざして——

福田 公子 平田 道憲  
小林 京子 西 敦子 高橋美与子

## 1. はじめに

家庭科は家庭を中心とした人間生活に関する現象で、世代を超えて繰り返し関心をもつ生活課題を学習内容としている。未来を生きる児童・生徒は、学校の家庭科を学ぶ以前に、父母の世代からの直接的しつけや家庭教育によって日常生活に必要な生活課題を学ぶことは勿論であるが、祖父母の世代からもまた多くのことを学んでいる。

日本の民俗学研究者の宮田登は、「かつての日本社会では、老人（祖父母）は、知恵があり経験があり優れた勤を働かせることができる人であり、子ども（孫）はそれを継承する関係にあり、老人はまさに子どもの中に再生するのである。」という見解を示している<sup>1)</sup>。急速に高齢化が進んでいる今日の社会においても、『老人力』<sup>2)</sup>とか『老熟の力』<sup>3)</sup>という書名に象徴されるように、人間が年をとることの深い意味を見つめ直すようになってきている。その時代を最も長く生きている老人（お年寄り・高齢者という）には、体験に裏打ちされた体験知や伝統的な日本文化を継承する伝承知などが保持されている。

ところが今日の家族や地域社会においては、高齢者と子どもの生活は分断される傾向にある。三世同居世帯は減少し、地域社会においても高齢者と子どもたちが自然に交流する場はほとんどなくなってきた。それ故、保育所や幼稚園あるいは小学校などで、意図的に交流する機会を設けるようになったが、日常生活の遊びの延長としての交流に留まり、真摯に高齢者から学ぶという試みは少ない。

これまで、著者等は高齢社会を題材とした授業を研究したが、それらは弱者としての後期高齢者を中心に検討してきた<sup>4)</sup>。また、世代相互間の情報伝達などの研究もみられるが、家庭内の検討であり、授業実践として行われたものではない<sup>5)</sup>。

そこで本研究では、家庭科の授業において、前期高

齢者の元気な高齢者との交流をすることによって、小学生および高校生がどのように体験知や伝承知を受け止め、現実世界を見る多角的な視野の拡大と思考の深まりをする授業のあり方について検討する。

## 2. 授業の計画

家庭科の授業は小学校5学年から高等学校2年まで必修であり、高齢者との交流体験を取り入れる課題探求学習はこの範囲で可能である。高齢者との交流体験からの学びを子どもの主体性に委ね、現実世界を見る多角的視野の拡大と思考の深まりをめざすならば、発達の適時性として、担当家庭科教師の経験から、小学校高学年および高等学校が妥当であると考えられた。

小学校高学年は、日常生活に適應できる年齢であり、先入観に捕らわれずに知識を受け入れることができる。いわゆる具体的操作思考の子ども期の最終段階である。祖父母との関係も親しいことが予測され、この段階で祖父母に対する敬愛の念をもって体験知・伝承知の伝達が可能であろうと考えられた。

高校生になると、自我も芽生え、大人に対しても批判的に応答するようになる。自分の世界をもつようになり、高齢者に対しても距離を置くようになる。そのような時だからこそ、人間の生き様に直接的に接することは、自分の殻を破り、新しい世界観を構築するために有効ではなかろうか。

小学生も高校生も、高齢者との交流体験を取り入れた家庭科の学習としては、課題探求学習が適すると考えられる。それまでの児童・生徒の日常生活の経験と交流する高齢者との相互関係から、自由に課題を設定し、主体的に探求する学習プロセスを重視したい。したがって授業は、大まかには教師が設計するけれども、学習者の課題は本人が設定し、自ら課題を探求していくような計画にした。

小学生の場合は、「祖父母に学ぼう」というテーマ

にて、祖父母や親しいお年寄りに知恵や技（わざ）についてインタビューし、発表活動を行うことで課題を持ち、数人のお年寄りを学校に招いてお話をし、交流を深めるといふ授業展開となった。一方、高校生の場合は、高齢者からの自分達に対するメッセージの聞き取り調査を行い、それらに対して自分たちの感想をまとめた後、日本の伝統芸道を身につけて活躍している高齢者から話を聞き、そこから高齢社会にかかわる課題テーマを設定して探求してレポートを書いた。

小学校については西教子が、高等学校については小林京子と高橋美与子が授業実践を行った。その経過を以下に詳述する。

### 3. 小学校の授業「祖父母に学ぼう」

#### 1) 授業の前提

本題材は、家族のなかでも特に、高齢者を対象とした異世代間の交流をねらいとして設定した。現在我が国は、少子高齢化社会を迎えており、この傾向は今後ますます拍車がかかる見通しである。これからの社会は、高齢者をどのように支えていくかという課題とともに、高齢者から何を学び、お互いが人間らしく生きていくためにどのように共生していくかを模索し、幸福に生きる社会をめざさなければならない。このことは、すべての世代にわたる生活実践課題であるといえる。しかしながら、現実には核家族化が進み、自分の祖父母といえども交流が少なくなっており、異世代間の交流を意図的に設定しなければ実現しにくい状況にあると予想される。

そこで、小学校段階で最も身近な高齢者である祖父母を対象に、生活の知恵や技について聞き取り調査をさせ、対話による祖父母とのふれあいを重ねることにより、人間関係を深めることを目的とした題材を開発した。また、昔の生活の知恵や技を聞き出し学び取ることは、合わせて、高齢者に対して敬意を抱くとともに、生活文化の伝承の大切さに気付くことにつながる考えた。

授業に入る前に、祖父母に関するアンケート調査を行った。調査項目は、祖父母の存在と年齢、同居の経験、居住地の状況、祖父母との対話の内容、祖父母にしてもらったこと、祖父母にしてあげたこと、祖父母に対する感情、祖父母以外のお年寄りとの関わりの有無についてである。

対象の子ども全員（38人）について、少なくとも一人は祖父母が健在であり、その年齢は、50代後半から70代までであった。また、現在祖父母の誰かと同居している子どもは6人であり、現在は同居していないが同居経験がある子どもは9人、同居経験のない子ども

は23人であった。

それぞれの祖父母の居住の状況については、およそ半数の子どもが「近くに住んでいる」と答え、休日に気軽に会いに行ける状況であると認識していた。「近い」か「遠い」かの判断は、物理的な距離によるだけではなく、休日に会いに行こうと思ったら行けるという主観的な距離感も加味して判断させた。結果的に見ると、1時間以内で行くことができる範囲を「近い」と考えている子どもが多かった。また、同じ敷地内に居住していても、玄関や台所が別で生活が各々独立している場合は、「近くに住んでいる」とみなした。

祖父母との対話について、16人が「役に立つ」と感じ、35人が「楽しい」と回答していた。「うるさい」「めんどくさい」と回答した子どもは1人のみであり、その子どもは同時に「役に立つ」「楽しい」とも回答していることから、祖父母との会話は多くの子どもが好感的に捉えていることと理解された。

祖父母に対する感情については、「尊敬している」「好き」「忠告は役に立つ」「健康が気になる」の4項目について、「とてもそうである」「まあまあそうである」「あまりそうでない」のいずれに該当するかを尋ねたところ、どの項目も、「とてもそうである」が60%を越え、「まあまあそうである」と合わせると、97%に達した。

以上のことから、子どもたちにとって祖父母は優しく温かい存在であり、祖父母に対して肯定的な感情を持っていることが認められた。

一方、祖父母以外のお年寄りと接する機会がない子どもが33%いることもわかっており、祖父母との関わりを題材とした学びが、広くお年寄りとの触れ合いに転化していくには、いくつかの段階が必要であることも示唆された。

#### 2) 実施計画と方法

授業における課題の設定の方法は、教師が提示した状況の中から、子どもが問題を見つけ教師と子どもとの話し合いでその後の学習課題や授業展開の方向を決定した。異世代間の対話の機会が少なくなっているという現状は、そうした生活の中に身を置いている子どもたちには問題として意識されにくいことである。教師の意図的な働き掛けによって、祖父母との対話を仕組み、その対話の経験からお年寄りから学びたいという欲求と学びたい内容を意識させ、学習課題へと高めていくことが妥当と考えた。本題材では、はじめに教師が「こよりを作って持ち寄り」という課題を提示する。まず、自分がこより作りに挑戦してその難しさを体験した後、こよりを作れる人を捜して作ってもらうことを次時までの課題とする。そして、家族の誰がど

うやって作ったか、作れた人にはなぜ作れるようになったのかを聞いておき、課題の結果を互いに報告し合っ  
て話し合いを深めていく中で、祖父母の世代の方の知  
恵や技に注目させて、お年寄りとの交流を各自の次の  
課題として意識させることとした。子ども同士の話し  
合いを活発にさせるためのタクティクスとしては、こ  
より作りで「できない」という体験を共有させること  
や、インタビューの仕方を例を挙げて説明する、すべ  
ての発表を保障するなどを用いることとする。

また、本題材の重要な視点は、単にお年寄りの知恵  
や技を学び取るのではなく、それらを直接お年寄り  
から聞き取ることにある。お年寄りの持つ知恵や技を、  
お年寄りの生活の文脈から切り離れた形で認識するの  
ではなく、お年寄りとの対話の中で、相手の息使いや、  
視線や、表情を目と耳と肌で感じながら相互コミュニ  
ケーションを組織することによって認識させたい。そ  
うすることが、子どもをお年寄りの経験世界に近付か  
せ、敬意と文化伝承に対する興味関心をもってお年寄  
りと接することができるようになると思われる。そうし  
た体験から学び得るものは、一人ひとり異なるもの  
となるかもしれないが、その子どもの現実として確実に  
受け入れられるものとなると推察される。お年寄り  
との対話を活発にさせるためのタクティクスとしては、  
手作りのお菓子とお茶を用意する、知恵や技について  
のインタビュー結果を掲示しておくなどして、共通な  
話題を見つけられるようにしておくことや、お話会の  
初めから小グループごとに着席してもらい、親密性を  
高めやすくする場を作るなどする。

交流の対象とするお年寄りは、子どもにとって最も  
身近なお年寄りである祖父母とする。異世代の人間関  
係を学習する場合、視野の広がりや既習経験から考  
えて、小学生の学習としては、家族から出発することが  
妥当であると思われる。しかしながら、祖父母との交流  
のない家庭が存在することもありうるため、家族にの  
み限定するのではなく、友達の祖父母、自分と同世代  
の孫がいるお年寄り、地域のお年寄りへと、関わりを  
広げていくように方向付けたい。

本題材の目標と指導計画は以下の通りである。

#### ○題材の目標

- ・お年寄りとの交流により、相互コミュニケーションを図る。
- ・お年寄りの持っている知恵や技に気付き、お年寄りから学ぼうという意欲を高める。
- ・自分が生活文化の伝承を担う社会の一員であることに気付く。

#### ○指導計画（「祖父母に学ぼう」全4時間）

- ・こより作りに挑戦しよう……………事前指導

- ・誰が、どんな知恵を持っている？……………1時間
- ・おじいさん、おばあさんから知恵や技を聞き出そう……………1時間
- ・お話をしよう……………2時間

#### 3) 授業「祖父母に学ぼう」の結果と考察

授業は、平成12年11月30日から12月16日にかけて行っ  
た。授業対象は、広島大学附属小学校1部5年38名で  
ある。授業記録をもとに、学習の経過を教師の働き掛  
け、子どもの反応、用いた指導タクティクスの3つの  
観点から学習過程表を作成して検討した。授業観察の  
方法は、全時間のVTRによる記録とテーブルコーダー  
による録音、3・4時間目については参与観察による。  
(1)事前調査「こより作り」

「祖父母の世代ではそれを作ったり使ったりするこ  
とが比較的日常的に行われていたのに対し、父母の世  
代ではほとんど使わなくなったか、市販品を利用した  
り他の物で代用しているもの」という観点から、こよ  
りを導入教材に選んだ。こより作りを課題にすること  
で、こよりを作れる人の数が、祖父母の世代には多く  
父母の世代に少ないことや、父母の世代でできる人は  
祖父母世代の人に教えてもらったという事実が導きだ  
せると予測した。そして、そのことが祖父母の持つ知  
恵や技に関心を持つ動機づけになると考えた。

まず、こよりの見本を提示して、子どもの注意を引  
き寄せる。見本は教師用のほか、子ども一人に一本を  
用意し、材料となる紙と共に封筒の中に入れて配付す  
る。こよりを知らない子どもたちに、手にとってどの  
ようなものかを確かめさせると同時に、家で作っても  
らうときの見本にするためである。

次に、こより作りを子どもたちに体験させる。どの  
ようにして出来上がっているかを簡単に説明し、作り  
方のコツは教えないで子ども自身に試行錯誤させる。  
几帳面に根気よく作業する子どもは、何とか似たよう  
な形のものを作ることができるかもしれないが、作っ  
た経験のない場合、完全なこよりはできない。この体  
験から、子どもたちはこより作りの難しさを実感する  
とともに、作り方にコツがあることに気付いた。

これらの活動の後、次時までの課題を説明する。そ  
れが「家族や知人に頼んで、こよりを作ってもらおう」  
ことである。この課題のねらいは、完成したこよりを  
持ち寄ることではなく、「誰ができて誰ができないか」  
「できた人はなぜできるようになったのか」を調べて  
くることにあった。依頼した一人目の人が「できた」  
場合、その人に全部作ってもらうのではなく、でき  
るだけ多くの人に尋ねてこより作りに挑戦してもら  
うように指示した。また、こより作りができるかでき  
ないかは、その人が、こよりの使用を必要とする生活状況

があったかどうかにもよる。事務などの仕事をしてきた人や商売をしていた人などは、仕事上の必要感に迫られてこよりを作り使用していたことが推察できる。親世代はもちろん、祖父母の世代でもできない人がいることが十分予想されるので、できない人ができる人に対して劣るわけではないことを、結果をまとめるときには十分に押さえた。

こより作りに応じてくれた人は、祖父母の世代で26人、父母の世代で68人、兄弟姉妹や友達など子どもの世代で22人であった。またこよりの出来具合を判定し、「完全にできた」とは、こより作りのコツを熟知しており、ある程度の長さがあって固く絞まっている場合をさし、「ほぼできた」は、見様見真似で作ってはあがるが、長さや絞まり具合が今一つの場合であり、それ以外は「できない」と判定した。祖父母の世代の半数が「完全にできた」のに対し、父母の世代では11.8%と四分の一以下に減少していることが認められる。子ども世代で「完全にできた」2人(9.1%)は、小学生1名と中学生1名であるが、学校の学習でこより作りの練習をした経験がある者であった。これらのことから、「こより作り」は、祖父母世代にはできるが父母の世代や子ども世代ではできにくくなっていることが認められ、本題材の導入教材として適切であったといえよう。

この教材については、日常生活の文脈においてこよりを持ち出すことの必然性に乏しいという問題も認められる。こよりを用いるなら、七夕で笹に短冊を結ぶときに用いることと合わせて7月に授業を実施するなど、子どもの生活現実との関連を図ることが課題である。

### (2) 聞き取り調査「上手なインタビュアーになろう」

祖父母から生活の知恵や技を聞き取る活動を組み入れた。この活動を通して、お年寄りの持っている知恵や技を知るとともに、祖父母との相互コミュニケーションを図ることを目的とした。

祖父母からどれだけの話を聞き出せるかは、子どもたちのインタビューの仕方に左右される。唐突に「生活の知恵や技を教えて」と言っただけでは、相手が質問の真意が理解できなかつたり昔の思い出に記憶が戻らなかつたりして、せっかく持っている知恵や技を伝えることができないかもしれない。そこで、インタビューの仕方をどのように工夫すれば知りたいことが聞き出せるか、よく考えてから、祖父母との会話に臨ませたい。聞き取ったことは、学習プリントに記入し、授業での発表材料とさせる。

すべての子どもが祖父母へのインタビューを実施し、インタビューによって子どもたちが聞き出した知恵や技の数は少ない子どもで3例、多い子どもで17例に及

び、予想以上の反応を得られた。子どもたちが授業内容に非常に興味を持って取り組んだことに加えて、保護者に授業のねらいと内容を伝えて、インタビューに協力を依頼したことによると推察される。内容としては、その真偽を問う必要のあるものや正確さを欠くものも見受けられるが、それを確かめることは先の課題とし、ここではその一つ一つについて解決を図ることはしない。

### (3) 「インタビューで知った知恵や技」の調査発表

祖父母から聞き取った生活の知恵や技について互いに発表し合う活動を組み入れる。この活動を通して、お年寄りが送ってきた生活に関心を持つとともに、さらに詳しく知りたいことなどを見つけ、新しい課題を設定することを目的とする。

方法は、まず小グループで互いにインタビューで得た内容を発表し合い、同じ内容があればまとめて、発表の準備をする。次に、発表する知恵や技をカードに書いて、黒板に貼る。すべてのグループからカードが出揃ったら、共通項を見つけてカードを移動させ、いくつかのまとまりに整理できるものは整理する。例えば、食生活に関すること、衣生活に関すること、住生活に関すること、健康維持に関することなどのまとま

表1 祖父母へインタビューした感想

- ・正直にいうと、びっくりした。私のおばあちゃんは、田舎とかに住んでいないから技はないと思っていたんだけど、なんと4個も教えたもらった。タニシや茶かすなどを使っていたことを知って、昔はやはり貧乏だったとわかった。だから、必死の思いで考えた方法をこれからも大切にしたい。(H子)
- ・おじいちゃん、おばあちゃん、いつもはわからないけど本当はいろんな知恵や技を持っていることにおどろきました。これから、もっといろんなことを私とお母さんに教えてほしいなと思います。いろいろ興味深いことがあったので、もっとくわしく知りたいなと思います。(H子)
- ・祖父母に聞いたときはびっくりしました。日常生活にあるものでも、工夫すると困っていることなどに役に立つんだと思いました。でもよく考えたなあと思います。(F子)
- ・おばあちゃんなどは、普段使っていることなかすごい知恵があることを知らずに、普段使っているからすごいと思う。(K男)
- ・昔の人は今みたいに便利なものがないから、便利なものを作り出していてスゴイと思った。(O子)
- ・物がない戦争などの時代は、このような知恵で生きぬいてきたので、改めて昔の人は強いなと思った。(N男)
- ・私が思っているよりもたくさん技がでてきてびっくりしました。今やっているようなことでもありました。どんどん技を生活に役立たたいです。(A子)
- ・人がいればその数の何倍も知恵があり、すべて生活の役立つことばかりなので感心した。ひまなときにいろいろやってみようと思った。(S男)
- ・たくさん知恵や技があってびっくりした。こんなにたくさんあるんだから、もっともたくさんあるんじゃないかなと思った。「やけどを治す技」とかいうのがあったけど、本当のかなあと思っってしまった。(H子)
- ・昔の人は、食物を地中にうめて、少しずつ食べていて、地中で食物を冷やして、すごいと思った。昔の人は食物を大事にしていたことがわかった。今の人は食物を粗末にしているから、私だけでもきちんとしようと思う。(K子)
- ・私のおばあさんが教えてくれた「メリケン粉と酢をまぜてガーゼにぬる」というのは、お父さんが一回手が痛かった時に、お母さんにやってもらっていました。これはひいおばあさんから伝えられたらしいので、びっくりしました。(S子)
- ・病気を治すのに、動物(へび、ムカデなど)を利用したのもあって、昔の人はすごいことができるんだなあと思いました。「今は病院が近くにあるけど、昔はそんなにたくさんなかったんで、自分で治せるものは自分で治す努力をしたのよ。」と祖母は言います。(N男)

りが予想される。カードを見ながら、書かれた内容についてわかりにくい点を、互いに質問応答し合う。そうした活動の後、質問に対して答えきれないことや、さらに詳しく知りたいことなどを次の学習課題に設定する。

聞き取った知恵や技は、班で照らし合わせた後、重ならないように配慮してカードに書き込ませ、黒板に貼るように指示したが、その数が教師の予想を上回り、そのすべてを貼ることができなかったため、授業後もカードを教室内に掲示して、聞き取った内容がいつでも見えるようにした。そして、インタビューを含む授業の感想や新しく生まれた課題について学習プリントに記入させ、翌日の提出を促した。学習プリントは自由記述とした。記述された内容を原文のまま表1に示す。

これらの記述から、それまで何気なく一緒に過ごしてきた祖父母が、実はいろんな知恵や技を持っていたことを改めて知って素直に驚き、そして祖父母に対して敬意を示すようになっていくことがわかる。また、子どもたちは生活に役立つ知恵が多くあることに感心し、勉強になった、もっと多くのことを知りたい、詳しく知りたい、試してみたいと思っていることがわかる。それは、知恵や技そのものに対して知的な関心を持ったことを示している。しかし、同時に、その知恵や技を身につけるためには、本や参考書を読むのではなく、お年寄りや大人から聞いたり習ったりすることがもっとも必要で近道であることを察知しているものと思われる。

この時点で、コミュニケーションによって祖父母との交流を図り、祖父母を人生の先輩として尊重する気持ちや、生活から生まれた文化を受け継いでいくことへの関心を高めるという目標は、概ね達成されたと思われる。

#### (4) お年寄りとの交流「お話をしよう」

祖父母を中心とするお年寄りの方々をお招きして、昔の生活の様子や知恵や技に関するお話を聞く活動であり、会話による相互コミュニケーションを図ることを目的とした。また、直接お年寄りとお話をする中で昔の生活の様子や知恵や技を聞くことは、お年寄りの送ってきた生活の文脈に沿った形でそれらを理解することにつながると考えた。

「お話し」は初めに全員でお話を聞く。授業に参加してくださる祖父母の方々には、これまでの学習の流れと、お話し会で話題にさせていただきたいことを予め打ち合わせしておく。その後小グループに別れて、自由な雰囲気でお話しする。1グループに祖父母の方お一人ずつついていたいただき、全体でのお話の続きをさらに詳しく

表2 お話会の感想

- ・今日の授業で、昔のことを今に伝えてあげたいと思いました。それはうち身などに馬肉を貼るということを知ったからです。そうしたらはれがひいて、病院に行かなくてもいいからです。昔はぜいたくができなかったそうなので、こういう技を使っていたのです。お茶の急須を北に向けてはいけないということを知りました。病人がふえるからだそうです。昔の人は古いもの信じていたのかも知れませんね。戦争などのことは語りたくないと言っていました。とても恐かったそうです。(T子)
- ・鼻血が出たときによもぎの葉をつめたり、首筋の毛を抜くと鼻血が止まるということを知りました。どうして髪を抜いた時に鼻血が止まるのかということ、また会った時に聞いておきたいです。(N男)
- ・私のおばあちゃんと雰囲気似ていたので話しやすかった。私は日常生活のことが聞きたかったので、ご飯の炊き方を教えてくださってうれしかった。私のおじいちゃんやおばあちゃんから聞いたことを紹介できてよかった。(H子)
- ・Aさんの子どもの頃の話を修学旅行の話を聞いたりした。自分のおじいちゃんおばあちゃんではない人と話をしたのは初めてです。でも、いろんなことを聞いて楽しかったです。Aさんは、昔からさつまいもをずっと食べていて嫌いになってしまっていたので、おやつを食べてもらえず残念だったけど、おもしろい時間が過ごせました。アオダイショウの話とかおもしろかったし、物を大切にしないとダメなと言っていました。(H子)
- ・Aさんはさつまいもを毎日食べていたので嫌いだっただけ。今度この会をするときは、さつまいもじゃないものを用意したい。でも、最後に一切たべてくれた。うれしい。(S男)
- ・ほくたちの今のくらしでは想像できないような昔の話を、ほくたちにわかりやすいように今あるものと関連づけて説明してくれたので、とてもよくわかりました。昔のマンガやおもちゃ、学校の勉強のこと、いろいろ説明してもらったけど、昔のことがもっと知りたいです。(K男)
- ・今日の授業で、今やっていないような治療法を教えてくださいました。こんにゃくをあたたためてお腹にあてると痛みが引くとか、鼻血が出たときによもぎの葉を鼻につめて、首のへこんでいるところに刺激を与えると止まるなどで、役に立つことばかりでした。私は、今になくてとても役に立つことが、なぜどんどん減っているのか疑問に思いました。(A子)
- ・お菓子がおいしくて、話もとてもよかったです。途中干ぶどうの話になり、干ぶどうは栄養がたくさんあることを教えてくださいました。Dさんは〇〇さんの残した干ぶどうを食べてあげたので、とてもやさしい人なんだなと思いました。くつ下をつけてろう時に電球を入れる知恵はよくわかりました。つくろうのはすごく大変で、今はDさんもつくろわずに買っているそうです。(S子)
- ・もっと長い時間話ができたらよかったです。最後はとても気が合ったから話し合いがうまくすすんだ。初対面じゃないような気がした。(I男)

く聞いたり、前時の授業で設定した学習課題を思い起して知りたいことを質問したりする。グループでのお話のときは、自分たちが作ったお菓子とお茶を召し上がっていただくとか、手作りのランチョンマットを用意するなどしておもてなしの心を表し、うちとけた雰囲気作りを工夫する。会の終わりに、自分たちのグループで話題になったことを発表し、他のグループと交流して、新しく知ったことをみんなのものにする。お話し会後の子どもの感想は、表2のようなものが記述された。

お話し会実施の評価すべき点は、直接お年寄りや接し対話ができただけでなく、この体験により、自分たちが設定した課題の解決のみでなく、お年寄りから感覚的に学んだものは大きいと推察する。お年寄りから聞いた話は、自らの体験をもとになされているせいかな感情が豊かに表現され、話に深みがあった。理屈では整理できないこともあり、「なぜそうなるの」「どうして〇〇しないの」という子どもの疑問に「そういう時代ではなかった」「それどころではなかった」という答えがなされた場面も多かった。しかし、「貧しかった

し、苦勞も多かったけれど、みんな仲が良かったし小さなことにも大きな喜びを感じていた」ということばに、工夫しながら協力して生活していた様子を感じ取ることができていた。

逆に今回のお話会の問題点として、子どもたちが自ら設定した課題が子どもによっては解決されなかったことがあげられる。お話会をすることは、聞き取り調査によって分かったことをさらに詳しく知りたいという子どもの願いから実現したものであるから、お話会の中でその課題が解決されることが子どもにとっての理想である。しかしながら、それぞれの班に来てくださったお年寄りが、班の子どもたちの知りたいことについて説明できないという場合、話題が他の方向へ発展していくことは当然のことであろう。お話会の後の子どもの感想の中をみると、話題のずれを問題と感じたり疑問に思ったりする記述は見当らず、お年寄りから聞いたお話に新しい興味を抱いたという内容のものがほとんどであった。このように、結果的には子どもたちは満足した形で会を終えることになったが、子どもたちが初めに設定した課題は、家庭生活を含めたこれからの学びの中での解決を待つことになった。

#### (5) 反省「お礼のお手紙を書こう」

お話会に参加してくださったお年寄りの方々に手紙を書いて、お礼の気持ちを表す活動で、相互コミュニケーションを図ることが目的である。お話会に来てくださったこと、親しみをこめてお話くださったこと、

表3 お礼の手紙

・Aさんへ  
先日はいろんなことを教えていただき、ありがとうございました。ほくAさんの話を聞いて、やはり今のくらしと昔のくらしはちがうなあと思いました。ほくは昔の方がいいと思います。それは、今は車などの排気ガスで空気が汚れていたり自然が減少しているけど、昔は空気がきれいでも自然も豊富だからです。あと、昔のことはよくわかったけど、もっとよく知りたいので、こういう機会があったらまた来てください。本当に楽しかったです。M男より

・Dさんへ  
Dさん、お忙しい中、穴のあいたくつ下に電球を入れてつくろった話や元気に卓球をしている話を教えてくださって、ありがとうございました。さつまいもとりんごの甘煮はどうでしたか。ほくは、〇〇さんのレーズンを食べてくれたことがすごかったです。初対面の人なのに、そんなことができるなんてすごいなあと感心して、ほくたちのことを気に入ってくれたのかなあと思いました。本当にいろんなことを教えてくださって楽しかったです。こういう機会があれば、また来てください。F男より

・Eさんへ  
Eさん、私たちにいろんなことを教えてくれましたね。鼻血を止める話をふたつ教えてもらったけど、私はときどき鼻血が出るのでためになりました。お茶を入れる急須では、北に向けてと病人がふえるということでした。私の家では急須はないけれど、ほくで役立てようと思います。あと、馬肉の話は打ち身に効くということでした。私はそんなにどたばたあばれないけど、他の人にやってあげようと思います。K子より

・Fさんへ  
この間は来ていただいてありがとうございました。ほくのおじいちゃん、7年前に病気になるまであまり言葉がしゃべれなくなって、昔のことをほとんど聞けませんでした。でも、Fさんから聞いて、昔はこんな風になっていたんだなということがわかりました。ほくが聞いて一番おどろいたことは、原爆は10秒間で広島を包んだということでした。ほくは、あんまりこんな機会がなくて、Fさんにお話を聞けてよかったです。Fさんに会えて本当によかったです。K男より

知らなかったことを教えてくださったことなどに対する気持ちを、自分の言葉で表現し相手に伝えさせる。お手紙を書く相手は、基本的には自分たちのグループに来てくださった方とし、それ以外の方に書きたい場合は自由とした。

お礼の手紙は、自発的に書いてこそ意味がある。子どもが、手紙を書きたいという気持ちを確かにするためには、お年寄りがどのように心を砕いて自分たちに接してくださったかを自覚する必要がある。お話会の中で、お年寄りに対してうれしいなと感じたことや、親しみを抱いてくださっているなと感じた場面を発表し合わせ、その自覚を高めさせた。

#### 4) 反省および課題

本題材における4時間の活動すべてを、子どもまたは子どもと教師と一緒に課題を設定する方法の学習を試みた。結果からいうと、この試みは、子どもの積極的な学びを実現することができ、本題材においては効果的であった。

導入教材にこよりを用いることは教師が決定したことであるが、こより作りの体験や、こより作り調べの課題から、導き出されたこどもの興味や関心は、自然にお年寄りに向き、次々と新しい課題を子どもも自身が設定していくことができた。中には、教師が提案してそれに子どもたちが賛成していくという形もあったが、子どもの気持ちと教師の願いが一致した、自然な課題設定であったと実感している。子どもたちにとっては、自分の課題解決に沿って授業が進むことになり、そのことが積極的な授業参加を実現させたと考えられる。

1時間目の課題は、こより作りの状況について情報交換し合うことにより、自分の周辺にいる人たちの中でこより作りに関する知恵や技を持っている人は誰かを明らかにし、こより作りの技をできるだけ習得することであった。この活動を通して、1時間目の終わりには知恵や技を学ぶ対象をお年寄りに向け、祖父母の持っている知恵や技をもっと見つけようという次の課題を生み出した。もともと祖父母に対して肯定的な感情を抱いている子どもたちであったから、インタビューにも積極的で、楽しみながら活動できた。

2時間目の活動はインタビュー内容の交流である。聞き取りに努力を払ったとはいえ、状況を知らない時代の話であるから、お互いの質問に納得のいくような応答ができるほどのものにはなっていない。さらに聞きたい、詳しく聞きたいという要求は当然起こってくる。そこで、2時間目の終わりには、直接お年寄りを招いて話を聞いたり技を教えてもらったりしたいということになった。お年寄りから直接学ぶという計画は、授業設計を行った当初から教師側にはあったが、どの

ような形式や内容にするかは子どもの課題の設定と、協力者となるお年寄りが誰かによって大きく左右される。今回のお話会の実施は、子どもの願いによって実現したものである。子どもが設定した課題は、概ね次の授業終了までに解決されたが、お話会を実施する中で解決を望んでいた課題については、子どもによっては達成されなかったものもある。

#### 4. 高等学校の授業「高齢社会と私たちの関わり」

##### 1) 授業の前提

今日、わが国ではこれから高齢社会が抱える多くの課題に、国民全体で考え対応していかなければならない。しかし、今日の高校生も多くは、家族構成や日々の生活から見ると、高齢者と接する機会は少ない傾向にあり、高齢者に対する理解や関心は希薄である。ましてや、自分たちの高齢期の生き方を真剣に考えようとはしていない。そこで、「家庭一般」の学習において、「高齢社会と私たちの関わり」の単元を設定し、高齢者との交流体験の機会を設けて、高齢者の生活について理解を深めたり、これから高齢社会と自分との関わりについて考えさせていくことを目指した授業を計画した。

##### 2) 実施計画と方法

###### (1) 事前調査

直接の交流対話に向けて、高齢者および高校生に事前に調査や課題を課した。

###### a. 高齢者に対しての質問

2000年7月に高校生の身近に存在する高齢者に対して、次の質問内容について質問紙で回答を求めた。

- ①最近の高校生を見て、思うことや望むこと。
- ②高校生に伝えておきたいこと。
- ③高校生との交流について

###### b. 高校生に対しての質問

従来より高校1年生に夏休みの課題として実施している「高齢者との対話」を課し、高齢者の青春時代の衣・食・住生活等の様子や対話を通して高齢者の気持ち(思い)を感じ取ったり、どう関わっていくとよいかを考えたり、さらに今後の高齢社会に向けてどうありたいか等をまとめることとした。

###### (2) 高齢者との直接交流体験

1998年度、生徒の中で同居している祖母数人に直接学校に出向いてもらい、生徒と共に伝統的な和菓子(おはぎ)作りを実践した。その実践の成果についてはすでに報告している通り、生徒たちにとって意義深いものであった<sup>6)</sup>。この度も、高齢者の思いを自分たちはどう受け止めたらいいか、また、お互いの交流の大切さを理解したり、さらにこれから高齢社会を支

えていく一員としてどう関わればよいか、さらに、自分の老後の生き方を考えることをねらいとして、高齢者に直接学校(教室)に出向いてもらい、交流対話を行う。

限られた話し合いの時間を有効に活用するため、事前の高齢者の調査回答をもとに、高校生の立場からの思いをまとめておく。

###### (3) まとめ及び課題設定

夏休みの課題であった「高齢者との対話」を通して、直接交流会後のお礼の手紙を交換していく中で、高校生は自分たちの今日の高齢者に対する関わり方・姿勢をまとめたり、自分の生き方に対しての課題設定に繋げる。

###### (4) 課題研究への取り組み

個々人の課題をもとに、共通的なものによってグループを編成し、グループ毎に具体的な課題研究に取り組む。グループ研究することによって、互いに友人たちの意見から幅広く考えられる。さらに、課題探求学習に向けて、経験豊かで、かつ、関連の深い家庭科以外の教科の先生からのアドバイスをいただきながら、多角的視野で学習を深化させていくこととした。

###### 3) 授業の結果と考察

###### (1) 高齢者から高校生へのメッセージと高校生の思い

高齢者の事前調査のメッセージ回答を、異なる視点から7項目に整理したものが表4であり、その高齢者

表4 高齢者から高校生へのメッセージ

<p>1. 最近の高校生の様子を見て思うこと、高校生に望むこと</p> <p>①残酷な事件が多く報道されている。またピアスやタバコなど自分のためにならないことをする人が多く、とても開放的な様子を見てみると、これから先がとても心配になってくる。</p> <p>世の中で自分が受け入れられなければ相手が悪いという風に、自己中心的な考え方をする人が多い。もっと人への思いやりをもって、物の命を大切に、人の傷みのわかる人になってほしい。</p> <p>②時代があまりにも変わっているので自分たちの頃と変わっても当然。それもいいと思う。姿・形ではその子の人間性はわからない。自由に自己表現できる世の中に生を受け、青春をエンジョイできる若者がうらやましくもあり、孫たちが平和ないい時代に生まれて本当によかったと思う。彼らを見てみるとまだまだ子どもだが、時に頼もしく思うこともある。将来についての選択の幅が広く、いくらでも勉強できる今を大切に生きてほしい。</p> <p>2. 高校生に伝えておきたいこと</p> <p>③失われつつある日本の伝統的行事や料理、昔から行われてきたその家や地方のしきたりなどを次の世代に伝えていってほしい。</p> <p>④戦いに聖戦はない。平和・自由・民主主義すべては多くの犠牲者の上に打ち建てられたものであり、まちがった伝え方はしないようにしたい。戦争時代を経験した者として戦争の悲惨さを伝えておきたい。</p> <p>⑤高校生としての誇りを持って、次期この世をリードする一人としての期待を持って大きく成長してほしい。今のことだけでなく、自分の将来や、国の将来のことにも目を向けてほしい。高齢化の社会、私たち年寄りが老後を不安なく生活できるような、社会を作ってほしい。</p> <p>⑥挨拶など礼儀の大切さをしてほしい。身だしなみをきちんとしないなどらしく見える。ことは使いにも気をつけてきれいな日本語で話してほしい。</p> <p>3. 高校生との交流について</p> <p>⑦お互いに語り合う機会を得て、高校生に学びたい。また、自分たちのいろいろな経験も語ってみたいと思う。孫世代との話し合いを持ちたくてもなじめず、反発されてしまう。</p>
---

表5 高齢者のメッセージに対する高校生の思い

- ① たったこれだけなので書きづらいが、高校生の悪い所しか見えてないようで、何だか読んでいてつらい。確かに言うことはもっともだと思う部分もあるのだけれど、もう少し良い所にも目を向けてほしい。
- ② 昔よりも今のほうがとても幸せで自由な世の中であると改めて思った。だから、今一杯がんばってすばらしい21世紀を私たちの手でつくっていかうと思った。
- ③ あまり意識はしたことがないが、考えてみると今と昔で変わっているものはたくさんあるのではないかと思う。料理について言うと、昔は母親が作っていたけれど、今はコンビニで調理してあるものを食べるとか、インスタントのものが増えたとか。時代の流れによって、仕方ないこととかあるけど、良いものは残していきたいと思う。そのためにも、お年寄りとの交流を深めたらと思う。
- ④ 戦争の話はできれば聞きたくない。広島生まれで、小学生の頃から犠牲者の話を聞いてきたけど、耳をふさぎたくないような話ばかりで嫌になる。でもこの文章の中にある『平和・自由・民主主義は犠牲者の上にうちは建てられたもの』を見て、逃げはいけない問題なんだと思いついた。
- ⑤ 今までの人たちがあまり予期していなかった問題を急に解決しろと言われても困る。しかし、その事を解決できるように社会にできる今の今にきちんと興味を持って考えていきたいと思う。
- ⑥ 挨拶や身だしなみはたいせつだと思う。でも、若者を批判するだけでなく、容認する姿勢を持ってほしい。互いに批判しあったり、反発するのは簡単だけれど、ぐっとこらえて謙歩するほうが世代間の溝は埋まるだろう。
- ⑦ 高齢者と会って話す機会を増やしてたくさんの方の事を学んでいきたい。高齢者も高校生に学びたいと考えているのはうれしい。高齢者ががさみしい思いをしないように心がけたいと思った。

の項目番号に対応した高校生の意見や感想をまとめたものが表5である。

これらを見ると、高齢者と高校生が互いに、先入観での考え方の違いも話し合うことで理解し合おうとしている様子が伺える点や、高校生の今日の姿の一面での見方に対して、もっと他面からの見方もして欲しい願いを述べている。この点は、やはり、両者のコミュニケーションの欠如から生じていることなので、話し合いを継続していけばもっと理解し合えることが可能である。

(2) 交流体験を通しての高校生の反応

a. 夏休み課題の「高齢者との対話」を通して、受け止めた感想や、高齢者に対する気持ちの変化、さらに、高齢社会に向け自分自身どうありたいかまとめたもの

表6 「高齢者との対話」からの印象

- 1) 話されているときの様子(身振り、手振り、口振り等)から感じたこと
  - ・普段、こんなに詳しく聞かない為か、自分の事を話せてうれしそうだった。話したらキリがないほど色々なエピソードがあった。
  - ・目が輝いていて、とてもいきいきしていた。うれしそうだった。
- 2) 高齢者に対して抱いていたイメージと、直接話をして試みての気持ちの変化等について
  - ・おばあちゃんの話はおもっていたよりはおもしろかった。考え方が違って話にくいかと思っていたけれど、それが逆に楽しかった。
  - ・自分が思っていたよりはずっと苦しい生活を送ってこられたと知って、わがままばかり言っていたらいいなと思った。もっといたわってあげたいという気持ちになった。
- 3) 高齢社会に向け、あなた自身はどうありたいですか。
  - ・昔のこと、戦時中のことなど体験者であり、日本の発展を見てこられた高齢者から学べることは沢山あると思う。それをしっかりと聞いて、次の世代へと受け継いでいくことが大切だと思った。また、もっと高齢者と話す機会を持つことも大切だと思った。
  - ・高齢者を単に弱い存在として見るのではなく、広い目で見たいと思った。自分が高齢者になった時、守られるだけの存在ではなく、社会の一員として生きていくことができるようにしようと思った。

の一例を表6に示す。

b. 高齢者を招いての直接交流から、強く印象を受けた思いを込めてのお礼の手紙の1例が表7である。

表6から伺えるように、高齢者の方はとても苦労され、経験豊かであることに改めて驚くと共に、若い自分たちと話すことを望んでおられることに気づいている。従って、もっと話を聞きたい気持ちに変化し、これからは積極的に話しかけていこうとしている。また、今後の生き方として、高齢社会のことを前向きに考えている様子がわかる。さらに、表7の感想文でも、交流をきっかけに先人の生き方から自己の今後の生き方(課題)を考えていこうとしている。

表7 お礼の手紙の例

今日は、たくさんお話をしてくださってありがとうございました。とても興味深く、おもしろかったです。私は普段、高齢者の方とお話したり、お話を聞いたりできません。私には八十歳の祖母がいますが、一緒に住んでいないので、なかなか会えなくて……。先生のお話を聞いていると、うちの祖母のことが頭に浮かび、「おばあちゃん、元気かなあ……。」と思いました。

先生はとてもお若いんですね！私は、「先生は六十歳くらいかなあ」と思っていたので、七十一歳と知って、とてもびっくりしました！先生のお話にもありましたが、やっぱり茶道や華道をしていらっしゃるからなんですよね。私も姿勢を良くしたいので、茶道や華道してみようかなあ？

先生のお話はどれも印象深かったけど、やっぱり一番は豆腐のお話です。私たちは今、水でふやかされている時期です。まわりの環境に協調してすばらしく力を発揮できるような大人になるには、今、自分は何をしたら良いのか。そういうことを考えさせられました。答えはこれから自分で探していこうと思います。これは、これからの私の課題になりそうです。先生のような素敵な大人になりたいと思いました。今日は本当にありがとうございました。

(3) 課題研究への取り組み

交流体験からの、個々人の課題をもとに、共通的な課題をもつもの同士でグループを編成し、より具体的な研究課題を設定してその課題探求に取り組む。その過程において、関連する他教科の先生のアドバイスを受けながら多角的視点から研究を深化させていく。その中で2000年4月からスタートした介護保険についての関心が高かったのか、この課題研究に取り組むものが比較的多かった。表8にはこの介護保険の課題研究で、他教科の先生のアドバイスを受けながら多角的に学習を深めている例を掲げる。

4) 反省及び課題

やはり、直接対話は、生徒の心を揺さぶり、意識の変革向上に効果的である。今日、家族形態の多様化が進み、かつ、個々人の生活を尊重するあまり、家族(家庭)での対話の欠如が社会的にも大きく問題視されている。特に高齢者との関わりは希薄である。これからの高齢社会を担う高校生に、自分とは無縁のものとするのではなく、現在の高齢者に関心を抱き、共に生き支え合っていく姿勢を培いたいものである。さらに、高齢者の生き方からいろいろ示唆を受け、今後の自分たちの生き方を模索する際の参考にさせたいもの





である。そこで、この度実践したように、高校生と高齢者が直接交流できるような環境を今後も可能な限り整えていきたい。

また、一つの事象を一面的視点からのみ捉えるのではなく、いろいろな角度から検討することは大切な学習方法である。そこで、家庭科以外の関連深い教科からの検討も意味深い。一般的に短絡的な学習になりやすいが、このように多角的視点からの学習を積み重ねることによって、真の学習スタイルも少しずつ身についていくのではないか。また、個人で取り組むより、時にはグループで共通的なテーマについて討論し、同輩の考えも交えながら自己の考え方・生き方に繋げていけることを願ってこのような学習形態を今後も折に触れ取り入れていきたい。

## 5. 結果と考察

家庭科の授業にて、小学校5年生を対象に「祖父母に学ぼう」、高等学校1年生を対象に「高齢社会と私たちの関わり」という題目にて、高齢者との直接交流体験を取り入れた課題探求学習を行った。いずれも、元気な前期高齢者に学校に来てもらい、各人の人生体験を交えながら話をしてもらい、児童・生徒の質問に答えてもらった。それまでの学習プロセスとして、小学生は自分の祖父母に知恵や技を尋ねてそれを発表して共有し、そこからさらに尋ねてみたい課題をもっていった。高校生の場合は、高齢者の青年時代の衣・食・住生活等および高校生についてどのように感じているかということを探ねて、自分たちの思いをまとめていた。すなわち、身近な高齢者の存在を確認し交流体験をしたうえで、さらなる直接交流体験として話し合いの場をもったのである。このように高齢者との交流のレベルを徐々に深めているので、いずれの場合も初めての出会いであるにもかかわらず非常に親密な関係を築くことができていた。

小学生の場合は「こより作り」という日常生活から失われた知恵や技に驚きをもって、祖父母の生きてきた生活を実感して、改めて尊敬の眼差しをいただいている。いずれの高齢者の方も、小学生が興味をもつような話題を中心に心配りをして、親しみをこめて参加して下さった。各グループとも、またどの児童も、積極的に質問をして納得するまで食い下がっていた。

一方高校生は、高齢者の世代の人々の自分達への言葉で聞き、それに対して自分達の意見を述べている。世代の違いにより、ものの見方や考え方に違いがあり、相互に交流することによって、理解が深まっていくということに気づいている。話し合いに参加して下さったのは、茶道や華道を教えている女性であり、日本文

化の伝承にかかわる話や、性役割分業にかかわる社会的課題等を体験として聞くことができた。そこから高齢社会に関する課題の探求へと発展させたが、熱心に課題探求活動に取り組んでいる。

両授業とも、課題の設定と課題探求の方法は、学習者が主体性をもって学習するように配慮されていた。学習者が自分で考えて、直接に高齢者とコミュニケーションをするという交流体験をすることによって、異世代の相互理解が深まったことは確かである。小学生と高校生のどちらの発達段階においても、多角的な視野の拡大と思考の深まりを可能にする授業展開であったといえよう。

## 6. おわりに

どの文化においても、人生経験の豊かな高齢者は次の世代を担う子どもの教育を担ってきた。変化の激しかった今日の社会では、ややもすると世代が分断される傾向がみられるが、時代が変わっても人間としての文化の営みの本質は受け継がれていかなければならない。人間の三世代にわたる交流が盛んになるような教育制度や社会システムをつくることにより、より精神的に豊かな子どもの発達と文化の創造を期待することができるのではないか。本授業のような試みから未来が開けてくるように感じられる。

## 注

- 1) 宮田登『老人と子供の民俗学』白水社、1996
- 2) 赤瀬川源平『老人力』筑摩書房、1998
- 3) 宮田登他『老熟の力—豊かなく老い>を求めて』早稲田大学出版部、2000、41
- 4) 岡本祐子・福田公子・小林京子・三宅美与子・西敦子「高齢化社会に関する家庭科授業の実践的研究Ⅰ—高齢化社会に関する小・中・高校生の意識調査の分析—」広島大学教育学部学部・附属共同研究体制研究紀要、第21号、1992、145-155  
・岡本祐子・福田公子・小林京子・三宅美与子・西敦子、橋本尚美・原田圭子「高齢化社会に関する家庭科授業の実践的研究Ⅱ—発展学習にみられる福祉思想と共感的理解—」広島大学教育学部学部・附属共同研究体制研究紀要、第22号、1993、137-146  
・岡本祐子・福田公子・小林京子・三宅美与子・西敦子「高齢化社会に関する家庭科授業の実践的研究Ⅲ—総合的課題研究活動を導入した授業実践の効果—」広島大学教育学部学部・附属共同研究体制研究紀要、第23号、1994、113-121
- 5) 平田道憲・岩重博文・木下瑞穂・片山徹之・一ノ瀬孝恵・日浦美智代、「家庭生活における世代間の

相互作用に関する研究(2)」広島大学教育学部学  
部・附属共同研究体制研究紀要, 第26号, 1997,  
131-138

6) 福田公子・佐藤一精・平田道憲・木下瑞穂・小林

京子・高橋美与子「家族・家庭生活の価値観の形成  
に関する授業の効果(Ⅱ)―高齢者が調理実習授業  
に参加した事例―」広島大学教育学部・関係附属学  
校園共同研究体制, 第27号, 1999, 173-180